観察のまど
子どものにわ（2）

砂上史子

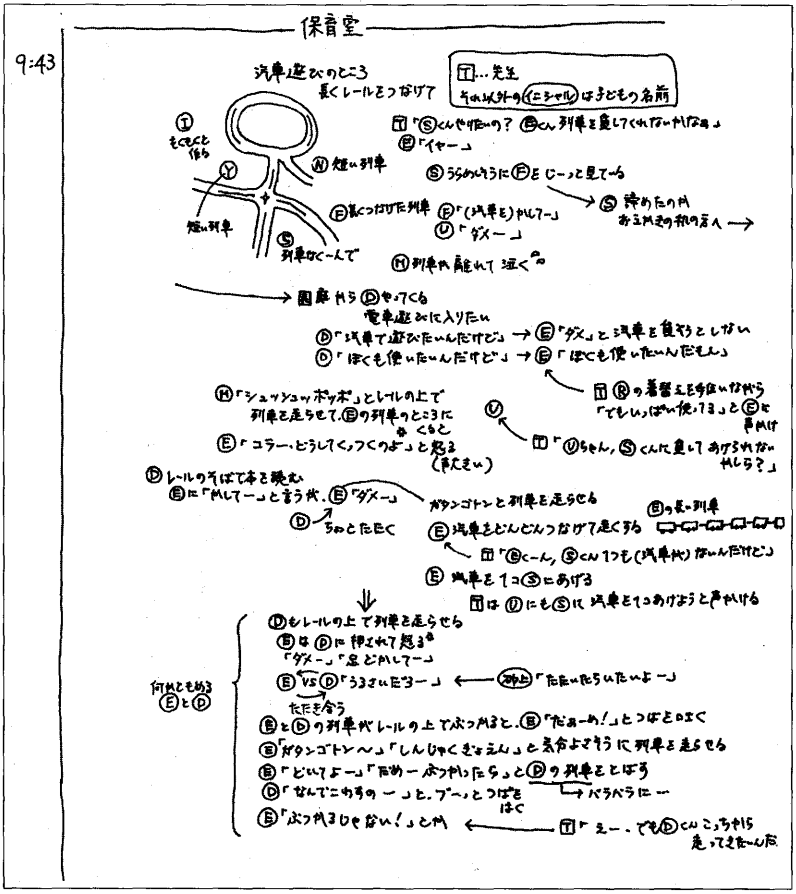
三歳児の汽車遊びに見る、人とのかかわりの育ち

同じ遊びの繰り返しを通して

幼稚園や保育所の中で子どもたちはブロックや積み木、ままごとなど、好きな遊びを繰り返します。継続的に観察を行っていると、同じ遊びであっても、遊びの中で人や物とのかかわりが変化していくことに気づきます。今回は、三歳児クラスの汽車遊びの事例を通して、子どもたちが遊びの中で他の子どもに出会い、ぶつかりながらも、他の子どもと一緒に遊ぶ楽しさを感じるようになる姿を見ていきたいと思います。

「どうしてくっつくのよ」他者を排除しようとする姿からの出発

図1は、一九九九年のある三歳児クラスの事例です。幼稚園生活にも慣れてきたと思われる五月下旬のこの事例では、Eくんが木製のレールを長くつなげています。小さな木製の汽車を何個も長くつなげているEくん、短い列車のKくんとNちゃん、一つも汽車を持っていないSくんがいて、さらに、そこへDくんもやってきます。図1では、汽車のないKくん



▲図1：5月下旬の汽車ごっこ

の気持ちを察した先生やDくんが、Eくんに汽車を貸してほしいと言いますが、Eくんは「イヤー」「ダメ」と貸そうとしません。

この場面のEくんは、長い列車を走らせたいという自分の思いを実現したい一心であり、自分のしたいことを追求する遊びの姿として理解できます。今井和子氏（一九九一）は二、三歳児が遊びの中で物をありったけ使うことがよく見られる

ことを指摘し、「ありったけの物を身に付けて満足感を味わう体験をくぐりぬけた子どもたちはやがて、物から解き放たれたように、自分の必要なだけ選んで使うようになったりするものです」と述べています。二歳から三歳の時期に物をたくさん持つことが子どもには重要であり、かつ自然な姿であると受け止めることが大切ではないかと思います。

ただし、集団で生活する保育の場では、他の子どもEくんと同様に汽車を走らせたいという思いがあり、それをいかに調整していくかが保育者の役割となります。特に、Sくんのようにじっと見ているけれど自分から主張できない子どもの気持ちをくみながら、たくさん使っている子に他の子も汽車を使いたいということを知らせていく必要があります。

図1の中で先生は、「Eくん（列車を）貸してくれないかなあ」「Eくん、Sくん一つも列車がないんだけど」と声をかけ、その結果Eくんは、Sくんに汽車を一個譲っています。子どもと子どもの橋渡しとして、保育者がこまめに他の子どもの存在や欲求を伝えていくことが大切なのだと気づかされます。

また、図1でEくんはレールの上で自分の汽車と他の子の汽車がぶつかると、怒って大きな声を出したり押したりたたいたり、他の子の汽車をバラバラにしたりしています。ぶつからずに遊べることはよいことですが、このように子ども同士がぶつかり合うことは、人とのかかわりの出発点として重要な経験であるといえます。担任の先生からうかがった話では、このときのEくんは「他者」は自分にとってじゃまな存在であり、排除しなくてはならないものと感じていると理解したうえで、Eくんが少しでも他者とかかわることの楽しさを経験してほしいと考え、かかわっていたとのことでした。

三歳児（あるいは四歳児の）入

園当初のいざこざは、子どもが他者と出会い、他者を肯定的な存在として受け止めるようになる過程として重要であり、その背後には保育者の個々の子どもについての理解に基づく援助があるといえます。いざこざをマイナスととらえるのではなく、それが人とのかかわりの出発点であり原点としてとらえることが必要となります。

「作ってあげるからー」
他者に応じつつ
自分を主張する

図1から、二週間後の六月上旬の観察では、Eくんは汽車を長くつなげて、自分の思いを強く主張して遊びつつも、自分の列車を走らせるために、Kくんに別のレールを作ったり、Gくんに汽車を三個貸したりする姿がわかります。自分を主張するだけでなく他者の存在を認めて対応し、他者に合わせて譲れる幅も少しずつ広くなってきたことが感じられます。

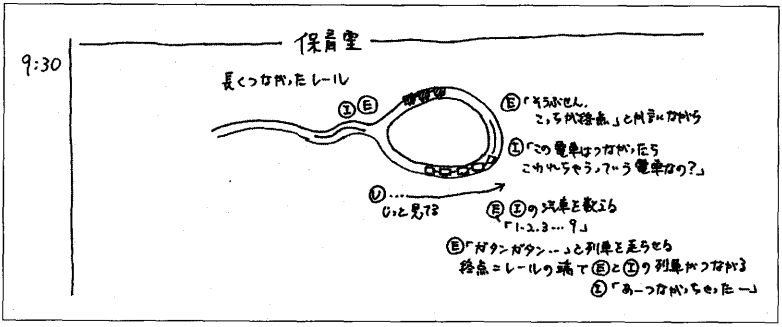
また、六月下旬の観察では、遊びのイメージをめぐって、KくんとEくんが駅の名前について、「本郷三丁目」「ちがうよー、目白駅」などと言い合う姿も見られました。いざこざには違いありませんが、その原因は、図1に見られた汽車が欲しい、汽車がぶつかったということから一歩進んで、同じイメージを共有しようする中で生じたズレにあるといえます。つまり、一緒に遊んでいるからこそ、生じるいざこざに変化してきています。この点から、いざこざの頻度や激しさではなく、何をめぐっていざこざが生じているのかといういざこざの「質」に注目することで、遊びを通しての子どもの育ちをより具体的にとらえることができると考えます。

「いっしょにやろー」
他者と遊ぶ楽しさを求めて

Eくんたちの電車の遊びは二学期以降も続いていきます。図2と図3の電車遊びの様子からは、一

学期とは異なり、たくさんの汽車をつなげようとすることはあっても、先生の言葉かけや他の子どもに「かして」と言われてすぐに汽車を譲る姿が見られます。また、レールをつなげる際に他の子にレールの道筋を話すなど、それぞれがレールに列車を走らせているのではなく、一緒に列車を走らせているという意識がより強くなってきていることがうかがえます。

レールの端っこでEくんとIくんの列車がつながった際の「あー、つながっちゃったー」という言葉（これはIくんの言葉ですが、おそらくEくんも共有していたといえます）を、図1の「コラー、どうしてくっつくのよ」という言葉と比べてもそのことはよくわかります。

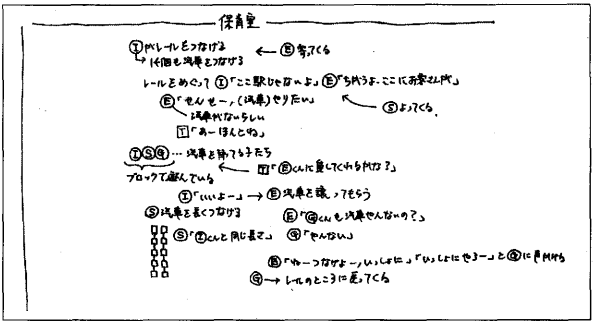


▲図2：10月下旬の汽車ごっこ

そして、二学期も中盤にさしかかった図3では、いつも汽車をたくさん使っていることの多かったEくんが、「汽車がない」と先生に訴ています。このとき、列車を手に入れた後でEくんがGくんに「汽車やんないのー」「ねー、いっしょにつなげよー」「いっしょにやろー」と声をかけている姿は、他者と共にあることを意識し、他者と一緒に遊ぶことの楽しさを求めている姿といえます。汽車遊びは、自分一人でやるものではなく、誰かと一緒にやるものという

意識がEくんの中にもあるのだと思われます。

入園して間もないころ、ちょっとしたことでぶつかり合っていた子どもたちが、一学期の終わりや二学期に入って落ちついて人とかかわるようになっていくことは、今回の事例にもあるように、「楽しい」から行う「遊び」だからこそ子ども同士の間で欲求がぶつかり合い、その経験が人とのかかわりを学ぶうえで重要であることを示しています。同時に、こうした変化は直線的に右肩上がりで生じるというよりも、他の子どもに譲れたり譲れなかったりするなど、ジグザグの過程をたどっていくものであり、そのジグザグ具合をうまく抱えて、時に軌道修正していくところに保育の意味があるのだと思います。



▲図3：11月上旬の汽車ごっこ

それはちょうど、事例の中で先生が、Eくんにとって「他者」がどのような存在であるかをふまえて、どのような経験をしてほしいかという願い（ねらい）をもって、その時どきの場面で相手の思いを伝え、大きな声を出さなくても伝わることや、「かして」と言うと貸してもらえることなどを具体的に投げかけていくことの中に埋め込まれているといえます。

（千葉大学　教育学部　保育学保育内容と発達との連関を研究）

引用文献

今井和子　「探索からごっこへ」『発達』No. 46、vol. 12、ミネルヴァ書房　一九九一年